

多文化就労場面における中国人看護師の適応実態に関する調査

Research on Chinese Nurse Adaption Situations in Multicultural Work Occurrences

龔 佳奕(千葉大学, 人文公共学府)

GONG JIAYI(Chiba University,

Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs)

Abstract

In recent years, Japan has been accepting nurses from various countries abroad. In this study, I conducted a narrative interview centering on four Chinese nurses who came to Japan through private NPO corporations, one of which I chose to be the main focus of my case study. The core of the interview pertained to the 'turning point' of the participant's life, and how she was able to adapt to a more multicultural society. I recorded the process using the diachronic perspective approach.

1. はじめに

現在日本における65歳以上の高齢者は3,459万人に達し(厚生労働省 2017),「超高齢化社会」となっている。厚生労働省(2010)によると2025年の看護職員の需要数は供給数を上回り,看護職員の不足が懸念されている。

こういった日本社会の現状を背景に,医療機関や福祉施設では,人手不足解消策として海外から直接看護師や介護福祉士になる留学生や研修生を迎え入れている。特に2008年以降には経済連携協定(以下,EPA)に基づき,インドネシア,フィリピン,ベトナム¹の3か国から外国人看護師の受け入れが本格的に開始された。

それに伴いEPAスキームで来日した看護・介護人材に関する研究は移民学(小川 2010;安里 2011),経済学(立川 2010)など多くの分野で行われている。日本語教育分野においても様々な研究が行われている。しかしながら,EPAスキームの制度上の必要性から国家試験に焦点をおいた研究が多く(中村・秋本 2010;三橋・丸山 2012;三枝 2009),外国人看護・介護人材が実際の職場,生活などの場面でどのような日本語を使い,どのような葛藤を伴いながら日本文化へ適応しているかに関する研究は管見の限り,嶋(2012)や上野(2013)を除いては見受けられない。

一方,このような公的な流れとは別に,民間のNPO法人や個人ルートなどによる外国人看護師の受け入れが行われている。2013年時点で既に200人を超えており,その大半が中国人である(朝日新聞 2013)。彼らはEPAスキームの外国人看護師とは来日背景や生活形態,既習の専門知識などが異なるため,EPAスキームとは別の角度からみる必要がある。しかし,現段階の外国人看護師に関する研究はほとんどEPAスキームにフォーカスし,EPAスキーム以外の外国人看護師に関する研究はいまだに少ない。

本研究では,民間のNPO法人によって中国から来日し,日本の看護師資格を取得した中国籍の看護師を調査対象とし,中国人看護師がどのように来日し,日々の生活と仕事の中でどのよ

うに多文化へ適応しているか、その過程の概要を記述することを目的とする。

なお、本稿での適応は、「ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第に慣れていく過程である」という高井(1989)の異文化適応の定義を援用する。

2. 民間の NPO 法人による中国人看護師候補者の受け入れ制度

中国人看護師候補者の受け入れ制度は NPO 法人毎に異なるが、ここではある NPO 法人の受け入れ制度の枠組を紹介する。図 1 は筆者が行ったインタビューの内容と石原(2012)を参考し、作成したものである。

図 1 に示したように、中国人看護師候補者はまず中国の医療系大学で選抜され、日本語講座などを受け、日本語能力試験 N1(以下、N1)の合格と中国の看護師試験の合格を図る。そして合格者は卒業と同時に来日することになっている。来日後、日本語学校に在籍しながら 2 年以内に国家試験に合格し、日本の看護師資格を取得することを目指す。無事に国家試験に合格し、資格を取得すれば在留資格が「医療」に変更でき、在留期限の更新回数の上限もなくなり、病院での就労・研修が可能になる。一方、合格できなければ、帰国となる。

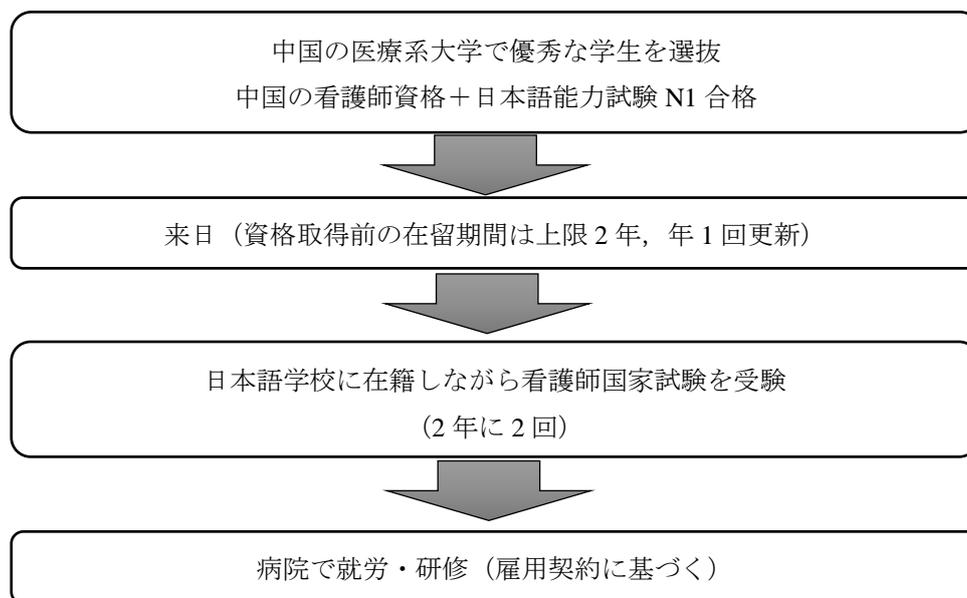


図 1 民間の NPO 法人による中国人看護師の資格取得までの流れ

3. 調査概要

2017 年 11 月から 12 月にかけて、上記の枠組で来日し、現在も病院に勤務している 4 名の中国人看護師を対象に調査を行ったが、本稿では中で最も典型的なケースとして CN1 の結果のみ取り上げる。

3.1 調査協力者

CN1 は中国雲南省出身の 20 代後半の女性である。年齢は 20 代後半、CN1 は故郷と離れた上海の大学で看護学を学んでいた。大学 4 年の時に NPO 法人による来日プロジェクトに参加した。大学では日本語教育が受けられなかったため、半年間独学で日本語を学び、N1 に挑んだが、合

格できなかった。その後も諦めずに、卒業と同時に同プロジェクトに参加している河南省の大学に移り、そこで日本語を学習した。その後、N1に合格し、2013年7月より来日し、日本語学校に在籍しながら、日本の看護師国家試験の勉強をしていた。そして、それにも合格し、2015年4月より北海道にある病院に勤務し、現在に至る。

3.2 データの収集

データはスマートフォンの通話アプリによるインタビューによって収集した。インタビューは鄭(2015)に参考し、ナラティブ・インタビューを援用した。質問の内容は「あなたが日本語を始めたきっかけや来日した理由、また日々の生活と職場の中で起きたエピソードなどこれまでのことをお話してください」というナラティブ生成質問を用いた。なお、インタビューが自由に語る雰囲気を作るため、インタビュー中は中国語を使用してインタビューを行った。また、調査協力者の会話の特徴を把握するために調査協力者の同意の上 IC レコーダによってインタビューの内容を録音した。

3.3 分析の枠組み

分析には IC レコーダで録音したインタビューを書き起こし記述したものを使用した。

3.3.1 出来事と転機

出来事は、ベルトー(2003:62)が述べるように、すでに起こった出来事だけではなく、「近い将来、実際に出来事になるはずの行為もまた含まれる」という広い範囲で捉えることにした。

また、桜井(2002:236)によると、成人が自分の人生の過去のある部分に目を向けるとき、その後の人生を決めた「決定的な経験」を見い出すことができ、この経験を核にしながらか人はライフストーリーを語り、自分のライフストーリーを構築していくという。そして、こうした経験をもとにした主観的リアリティの変化、新しい意味体系の獲得過程を「転機」としている。

そして、どのような出来事が転機になるかについて、桜井・小林(2005:168)では、人々は自己の生活経験をすべて語るわけではなく、語るに値すると思ったことを中心に語るはずであると述べた。また、そこでは「その後の人生をきめたまさに(決定的な)経験」が語られるとし、それは「新しい自己像の獲得やアイデンティティ形成にかかわる過程」であると述べている。

以上の概念を踏まえ、本稿では CN1 が語った内容を個々の出来事として見なす。そして出来事を「転機」として捉え、「転機」の前後でどのような語りが見られたかを記述する。そして、通時的に「転機」を見ることで、彼女がどのように日本語を使用しながら、多文化へ適応してきたかを明らかにしていく。

4. 結果

4.1 来日経緯

4.1.1 日中看護師に対する態度の違い

インタビュー冒頭、CN1 に来日した理由を聞いたところ、CN1 はこのように語っていた。

CN1：自己在国内护士这条路感觉就是没什么前途，干得很压抑。或许换个环境，生活态度会有所改变吧。(筆者訳：(中国)国内で看護師になるのは将来性がないと感じた、鬱になりそう。環境が変わったら、生活態度もかわるかも。)

CN1 は元々医学に興味があったが、大学受験の際に点数が足りず、看護学部に配置された。彼女は看護学に興味はなかったが、当時の中国社会は受験浪人に対し厳しいため、彼女は仕方なく看護学を学んでいた。しかし、看護学を専攻したとはいえ、彼女は中国で看護師になることに対して、否定的な態度であった。その行動として、CN1 は在学中、転学部試験に挑んだことがある。結果は失敗したが、そのことから彼女は自分の人生を変えようという考えと行動力ができたと言える。

そして、中国で看護師になることに対し否定的な考え方が一方、日本の看護師のイメージについて、次のように語っていた。

CN1：就觉得日本的护士地位要比国内高，而且我看日剧里面医院的环境也都很好，很干净。（筆者訳：日本の看護師の地位は(中国)国内より高いと感じた、そして日本のドラマを見ると、病院の環境もいい、とても綺麗。）

CN1 は日本の看護師の地位や病院の環境について肯定的なイメージを持っていた。彼女が日本語を学んだ経験がないにもかかわらず日本へ行こうと決意したのは、この肯定的なイメージが作用したためだと考えられる。

4.1.2 N1 合格へのプレッシャー

3.1 で述べたように、CN1 は大学卒業後河南省の大学に移り、そこで日本語を学習していた。同大学の学生たちはもうすでに N1 レベルの学習を始めていた。CN1 は授業についていくのに必死だった。CN1 は当時の心境を以下のように語っていた。

CN1：就觉得这辈子过的最苦的就是在〇〇(大学名)的那一年，又要面临面试，一级要1年之内把它过掉，不然今后的人生就不知道怎么办了。（筆者訳：〇〇(大学)にいた1年は人生で最も苦しいと感じた、面接もある、1年でN1を合格しないと、今後の人生はどうしよう。）

CN1 は NPO 法人による来日の面接へのプレッシャーと不合格への不安を抱えながら、日本語を一生懸命勉強していた。インタビュー中、来日前の語りについて、河南省の大学に在籍したこの時期の語り最も多く、そして感情的である。そのことから、「N1 の試験勉強」という出来事が彼女に大きな影響を与えていると考えられる。

4.2 日本語学校在籍中の学習

来日前は主に N1 対策の日本語学習を中心としていた。来日後は、日本語学校に在籍し、日本語の学習を続けた。この時期に学習した日本語は概ね看護学の専門日本語と対人コミュニケーションに関する日本語に分けられる。そして、日本語の学習のみならず、日本の看護師国家試験に合格するため、看護師国家試験の勉強もしていた。このように、学習内容は減るどころか増えていると言えよう。しかし、来日後の日本語学習について、CN1 は次のように語っている。

CN1：因为一级已经过了呀，就感觉没什么学习动力了，就剩一个护士考试了呀，那护士考试么都是选择题嘛，很简单的呀。(筆者訳：だってN1はもう合格したし、勉強のモチベーションがないって感じ、後は看護の試験だけだし、全部選択問題だし、簡単だよ。)

彼女はN1に合格したが、それで燃え尽きてしまい、学習の意欲が下がったと考えられる。また、ここで注目したいのは、彼女の上述の発話がN1合格前の心境を語る時に比べたら明らかに軽快なトーンをとっていることである。それは彼女がN1合格への重圧から解放されたことへの裏付けと考えられる。

4.3 就労中の出来事

4.3.1 方言への戸惑い

日本の病院での就労にあたって、CN1は医療現場で実際に使用している日本語への戸惑いが見られた。

CN1：他们说那个吃饭，你知道他们怎么说嘛，他们说「マンマ」。(筆者訳：彼らのご飯を言う時、何をいうと思う、彼らは「マンマ」という。)

彼女は北海道の病院で勤務している、そしてそこで北海道の方言を耳にする。当時彼女の日本語学習歴がまだ短く、標準語しか聞いたことがなく、初めて聞いた方言に戸惑いを感じた。しかも勤務中であり、時間的余裕がないため、彼女の戸惑いが仕事に支障をきたしている。

CN1：刚开始听不懂，他们有的时候就不跟我说，直接自己做了。(筆者訳：最初は意味が分からないから、彼ら(同僚)は時々私に言わずに自分でやることもある。)

その後、CN1は周囲の言葉に注目するようになり、徐々に「自分も時々方言を使ったり」するようになった。彼女は「可愛い」は北海道弁では「めんこい」、「なんで」は「なんしで」など色々例を挙げていた。今では時々患者と方言を使って話すなど、彼女にとって方言は患者とのコミュニケーションのストラテジーの一つになっている。

4.3.2 看護助手の業務をやらされた

CN1は国家試験に合格し、病院に入った当初、看護師という肩書を持ちながら、約2ヶ月看護助手の業務をやらされた。「同期の日本人は2週間しか看護助手の業務をやっていないのに、なぜ自分だけ2ヶ月もやらなければならないのか」と思った彼女は上司に訴えたが、上司は「日本語能力が不足している」と答えた。彼女は「悔しかった」と語っていた。

特に勤務中彼女は看護師の制服を着ているため、よく患者から質問をされるが、看護助手としての情報しか知らされていないため、答えることはできなかった。その度に、自分の無力さを感じていた。

ピラー(2014)は「アイデンティティ」は言語の習熟度によって決められていると指摘している。CN1は日本語の習熟度の関係で、上司の目には「看護師に務まらない人」と映っており、

そのため彼女に助手の業務をやらせた。そして看護師としてはみなされず、このことが CN1 のアイデンティティの形成に大きな影響を与えている。

CN1 : 哎, 那还有什么办法, 这是在日本, 又不能辞职, 只好干咯。(筆者訳: はあ, どうにもならない, ここは日本だし, 辞められないし, やるしかないよ.)

CN1 は悔しいさを抱えながら仕事を続けていた。日本語の習熟度によって上司から決めつけたアイデンティティが彼女の本来のアイデンティティと影響しながら, 新たなアイデンティティを形成していると考えられる。

5. 考察とまとめ

丁・譚(2013)によると中国での看護学の教育は長い間中学卒業後の専門学校で行われ, 1983 年から大学で看護学を学ぶようになったが, 未だに専門学校での教育が主流である。そのため, 中国社会における看護師の社会的地位は高くない。また, 2003 年から看護師が教育部及び衛生部より技能緊欠型人才と認定されると共に, 大学が募集人数を拡大し, 他の医療系分野を志望した受験生を看護学に配置することが度々あった。つまり, 中国で看護を学んでいる大学生は CN1 のように, 中国で看護師になることに對し否定的な態度である可能性が十分にある。また国際交流基金(2016)によると中国では約 65%の学習者が高等教育機関で日本語を勉強している。つまり, CN1 のように大学に入ってから, 一から日本語を学んでいる人は少なくないと考えられる。これらのことから, 日本の医療機関に中国人看護師を受け入れる際に, この看護師への否定的な態度に対するメンタルケアや日本語学習への意欲維持などのサポートが必要であろう。

また, 大谷(2016)によると, 病院で使われている日本語の表現には医師や看護師同士のコミュニケーションや看護記録への記載のために用いられる専門的な表現, 患者や家族などとの意思疎通に用いられる一般的な表現, 医療現場で用いられる実践的な表現と 3 種類が存在している。この「実践的な表現」は学校では教えられていないため, CN1 は戸惑いを感じていた。今後の指導ではこういった「実践的な表現」も視野に入れた方がよいと考えられる。

最後に, 中国人看護師が日本社会へ適応していく際に, 日本人側も彼らのアイデンティティ保持を意識して接する必要がある。また, 彼らが地域住民とのインターアクションについてどのような意識を持っているか調査することを, 今後の課題としたい。

注 1: ベトナムの看護師候補者は平成 26 年度より導入が開始された。

参考文献

- 安里和晃 (2011).労働鎖国の崩壊: 人口減少社会の担い手はだれか 安里和晃(編) ダイヤモンド社
- 朝日新聞 (2013).中国人看護師が急増 <https://imaid.or.jp/images/130521b.pdf> 2018.1.17 閲覧
- ベルトー, D.(2003).ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ ベルトー, D. (編) 小林多寿子訳 ミネルヴァ書房
- 丁洪瓊, 譚嚴 (2013).護理專業人才現狀分析 護理研究 27(30) pp.3329-3331
- 石原美知子 (2012).日本の医療現場における中国人看護師とコミュニケーション—病院赴任直後の言葉の問題を中心に— コミュニケーション科学(36) pp.67-81 東京経済大学コ

コミュニケーション学会

国際交流基金 (2016).日本語教育 国・地域別情報

<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2016/china.html> 2018.2.8 閲覧

厚生労働省 (2017).平成 29 年度版高齢者白書

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf 2018.1.17 閲覧

厚生労働省 (2010).第七次看護職員需給見通しに関する検討会報告書

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000z68f-img/2r9852000000z6df.pdf>

2018.1.17 閲覧

三枝令子 (2009).EPA による外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れと日本語教育—国家試験に関連した動きと展望—介護福祉士国家試験の分析 2009 年日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.52-54 日本語教育学会

三橋麻子, 丸山真貴子 (2012).EPA 介護福祉士候補者向け国家試験対策—効率よく解くためのテクニク 2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集 pp.217-222 日本語教育学会

中村愛, 秋本瞳 (2010).介護福祉士候補者向け国家試験対策のためのコーパス調査 2010 年度日本語教育学会春季大会予稿集 pp.300-305 日本語教育学会

小川全夫 (2010).老いる東アジアへの取り組み : 相互理解と連携の拠点形成を 小川全夫(編)九州大学出版会

大谷晋也 (2016).「わかりやすい日本語文書」を目指して-病院文書の例を中心に インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践 三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也(編) pp.131-148 くろしお出版

ピラー, イングリッド(2014).異文化コミュニケーションを問いなおす:ディスコース分析・社会言語学的視点からの考察 ピラー, イングリッド(編) 高橋君江, 渡辺幸倫ほか訳 pp.198-202 創元社

桜井厚 (2002).インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方 せりか書房

桜井厚, 小林多寿子 (2005).ライフストーリー・インタビュー質的研究入門 桜井厚・小林多寿子(編) せりか書房

嶋ちはる (2012).看護・介護に従事する外国人の職場適応実態に関する調査研究 豊かな高齢社会の探究 調査研究報告書 (20) pp.1-18 ユニバーサル財団

立川和美 (2010).外国人介護福祉士をめぐる諸問題: EPA による受け入れを中心に 流通経済大学論集 45(3) pp.119-126 流通経済大学

高井次郎 (1989).在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育學部紀要 教育心理学科 36 pp.139-147 名古屋大学

鄭京姫 (2015).語りから得られる方法から人間のライフに関わる研究へ「日本語人生」に出会うための物語より 日本語教育のための質的研究入門 舘岡洋子(編) 初版 pp.139-158 ココ出版

上野美香 (2013).介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題 日本語教育 156(0) pp.1-15 日本語教育学会